

図11 遊びのみ場面（保育単位）の面積・1人あたり面積と評価の関係

クラス全体での面積ともに明確な傾向は読み取れず、同程度の面積でも評価が分散している。しかしクラス全体では面積が多くなると「狭い」評価が見られなくなる傾向が読み取れ、遊びのみ面積を確保することで広さ感評価が上がることを期待できる。

0・1歳児混合クラスでは、事例が少なく明確な傾向が読み取りにくいものの、1人あたり遊びのみ面積が0.5㎡以上には「狭い」評価がなく、保育室全体での遊びのみ面積が16㎡以上には「狭い」評価がない。

#### 4) 遊びのみの1人あたり面積、クラス内の園児人数と評価の関係（図11）

広さ感評価には、保育室の面積、1人あたりの面積とともに、保育の人数規模も影響していると思われる。そこで遊び専用確保された面積と保育人数の関係をみると（図11）、1歳児保育室の場合にはグラフの右上に「狭い」評価が分布していることが読み取れる。これは、保育の人数規模が大きいほど1人あたり面積を広く確保することが必要になることを示唆すると思われる（1人あたり面積が同じでも、保育規模が大きくなると「狭い」と評価されている）。

2歳児クラスでは、保育規模は影響せず1人あたり遊びのみ面積が増えるとむしろ「狭い」とする評価が多い。遊び専用の面積を確保しようとする中で手狭巻につながっている可能性が指摘できる。

0, 1歳児保育室の場合には保育人数にはよらず、1人あたり遊びのみ面積が少ない場合に「狭い」評価が分布していることがわかる。移動能力の混在が著しい環境であるため、静的な遊びの面積を明確に確保することが広さ感評価につながると考える。

#### 5) 遊びの面積と広さ感評価との関係（図12）

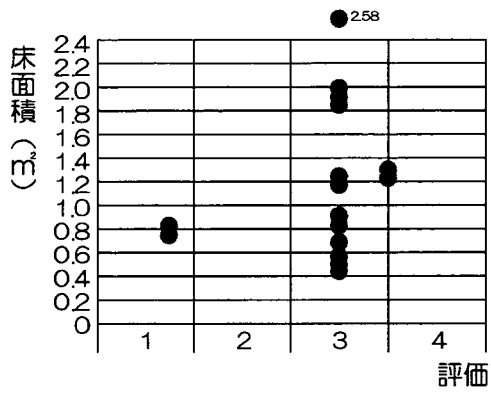
図12に、保育室全体での遊び面積／その1人あたり面積と自由保育時の広さ感評価の関係を示した。これは、一日を通して遊びに使われた面積が広さ感評価に影響を与えるかを分析したものである。

0歳児クラスでは、事例は少ないものの0.8㎡以上の1人あたり遊び面積がある場合に「狭い」評価はなく、クラスあたりでは7.5㎡以上の面積がある場合に「狭い」評価がない。

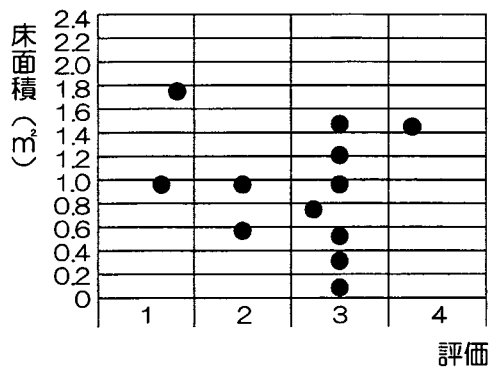
1歳児クラスでは異常値があるものの1人あたり1.0

遊びの1人あたり面積

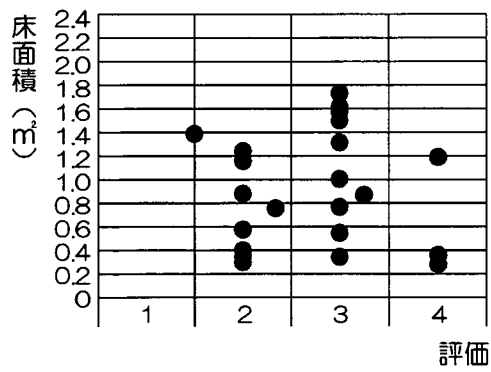
0歳児



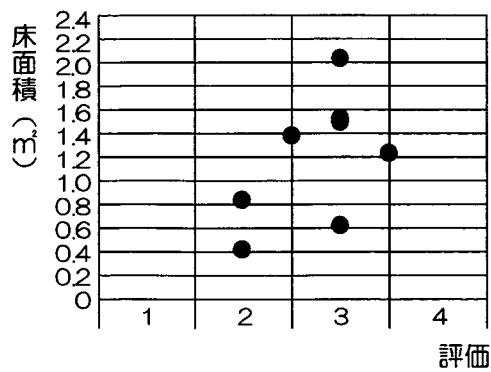
1歳児



2歳児



0・1歳児混合



遊びのクラス面積

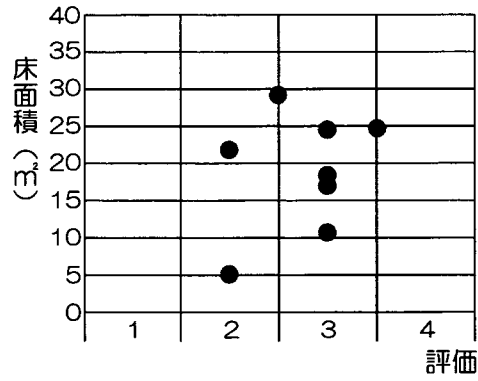
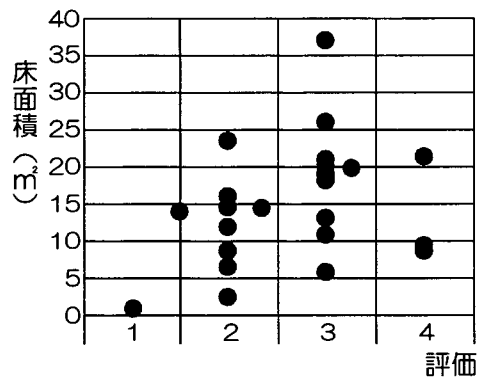
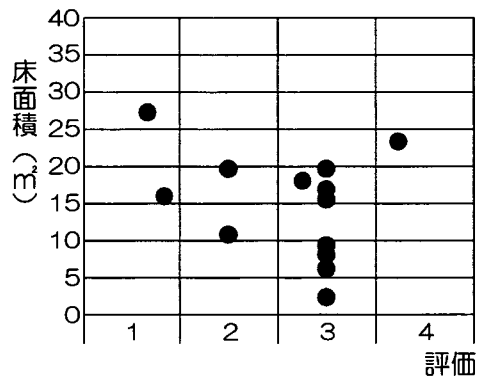
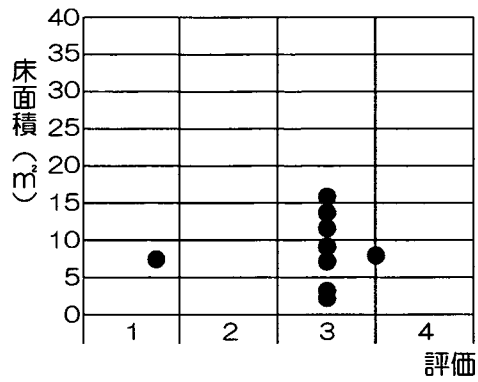


図 12 遊び場面の面積・1人あたり面積と評価の関係

遊びの1人あたり面積

● : ちょうどいい ▲ : せまい

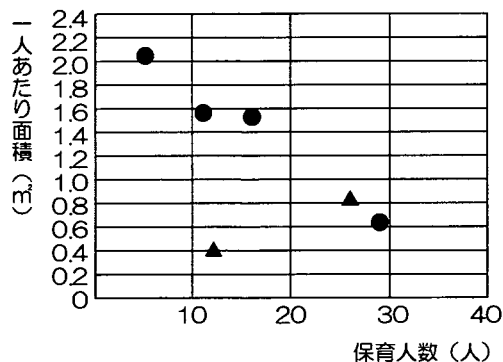
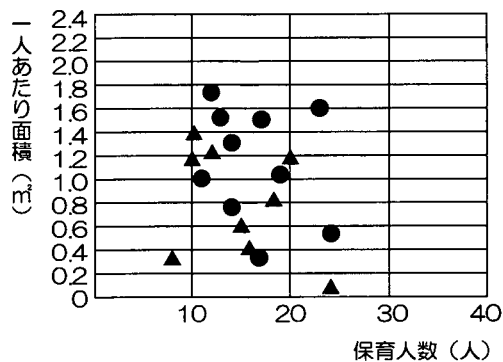
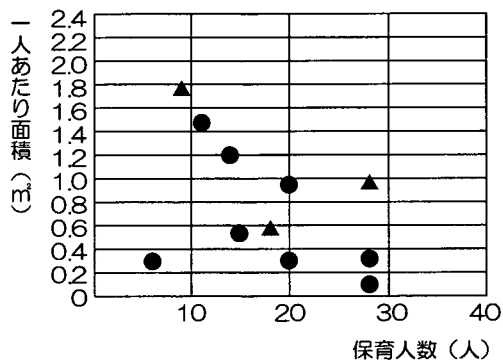
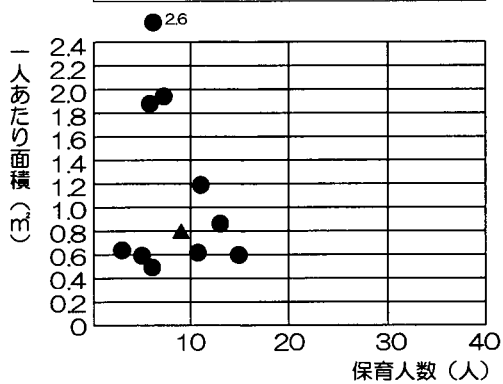


図 13 遊び場面 (保育単位) の面積・1人あたり面積と評価の関係

m<sup>2</sup>の面積がある場合には「狭い」評価がない。なお保育室全体では評価にばらつきがあり傾向を把握することはできない。

2歳児クラスでは1人あたり1.4m<sup>2</sup>、保育室全体で24m<sup>2</sup>以上の場合に「狭い」評価がない。全体に1人あたり面積、保育室全体で面積が分散しており、遊び活動に使われる面積に大きな差異があることがわかる。

0・1歳混合クラスでは傾向が明確ではない。

6) 遊びの1人あたり面積、クラス内の園児人数と評価の関係 (図 13)

遊び面積と保育人数、広さ感評価の関係を図 13 に示す。

1歳児保育室、0・1歳児混合保育室では遊びのみ面積での分析と類似した結果であるが、2歳児保育室では逆転の現象があり、1人あたり遊び面積が同じ場合、保育人数が少ない方が「狭い」評価となる傾向がある。

F. 4 コーナーと評価の関係

以上から、広さ感評価は単に面積のみで説明できないことが明らかである。また、活動の内容と一定の関係があることがわかった。そこで、保育室の使い方と広さ感評価の関係を見るため、観察調査の結果に基づき、コーナーの設置状況と広さ感評価の関係について考察する。

1) 学齢とコーナー数の関係 (図 14)

まず、学齢別に保育室に設置された固定的なコーナーの数、該当する保育室の数を示す (一日の間で出し入れされるようなコーナーは除外した)。図では、縦軸が学齢、横軸がコーナー数、円の大きさが保育所の数を示している。

この図から、0歳児室よりも1,2歳児保育室でコーナーを多数設置する保育室 (施設) が多い傾向があることがわかる。コーナーをもっと多く設けていた事例は、1歳児室で7コーナーであった。また0歳児室ではいずれの事例でも1以上のコーナーを設けている。一方で、0・1歳児混合保育室、1,2歳児保育室ではコーナーをまったく設けていない保育室も一定数あることがわかる。

## 2) コーナー数と評価の関係 (図 15)

図 15 は、コーナーの数と自由保育時の広さ感評価の関係を示した図である。

この図から、全体的に見るとコーナー数が少ないからといって広さ感評価が低いわけではないが、コーナー数が4を超える事例では、「狭い」評価がないことがわかる。

年齢別に見ると、0, 1, 2 歳児保育室ではコーナー数と広さ感評価には正の相関があり、コーナー数が多いと広さ感評価が高いという関係が見いだせる。しかし、0・1 歳児混合保育室では逆にコーナー数が多いと広さ感評価が低いという傾向となっている。0, 1 歳児混合保育室については、発達年齢が混在していることで特殊なニーズが生じている可能性がある。

## 3) 最大コーナーと最小コーナーの面積差と評価の関係 (図 16)

コーナーは、同程度の大きさのコーナーを設けることが望ましいのか、あるいは多様な大きさのコーナーを設けることが望ましいのかを確認するため、保育室内の最も大きいコーナーと、最も小さいコーナーの面積の差と、自由保育時の広さ感評価の関係を図 16 に示した。

図から、全体ではコーナーの大きさに差がないと広さ感評価が低いという傾向はないものの、面積に差があると「狭い」評価がないことがわかる。

その傾向は1, 2 歳児保育室が示す傾向によるもので、コーナーの面積に差異があるほど広さ感評価が高いという正の相関が成り立っている。

一方、0 歳児室と0・1 歳児室混合保育室ではコーナーの面積差と評価には関係は見いだせない。

## 4) 使用可能壁面長とコーナー数の関係 (図 17)

コーナーの設置が広さ感評価に良い影響を与える可能性が示されたため、どのような保育室であればコーナーを作りやすいかを考察する。

保育室内の壁面のうち、比較的容易にコーナーを設けやすいと考えられる壁面、つまり腰壁を含み、収納面・窓・扉を除いた壁面を、使用可能壁面長と定義し、この長さでコーナー数の関係を見る (図 17)。

図 17 は、使用可能壁面長 / 全壁面 (使用可能壁面長

と全壁面の比) とコーナー数の関係を示す。全体的に見ると、使用可能壁面長の割合が多くなるほどコーナー数が長くなるという関係はなく、割合が高い場合にもコーナーをあまり設けていない事例が多々見られるものの、使用可能壁面長の割合が高い場合には、コーナー数が少ない事例がないことが読み取れる。

0 歳児保育室の場合には、使用可能壁面長の割合とコーナー数には相関的な関係はなく、傾向は定かでは

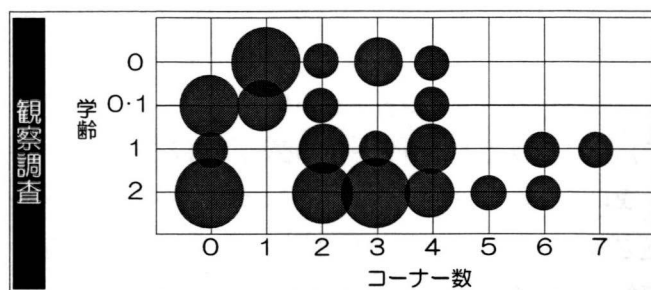


図 14 年齢とコーナー数の関係

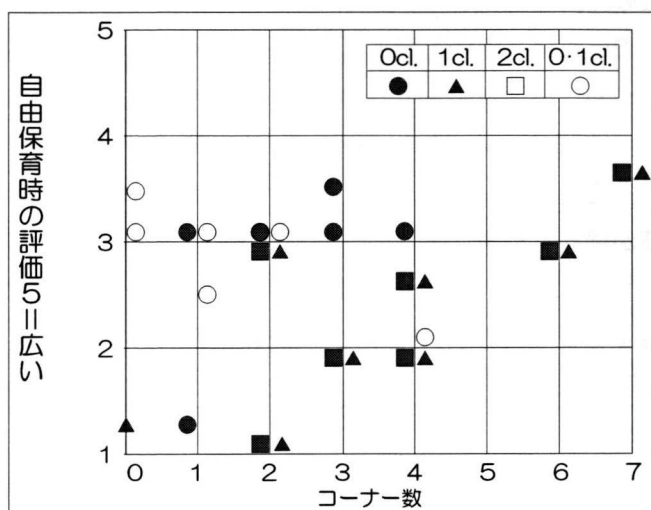


図 15 コーナー数と評価の関係

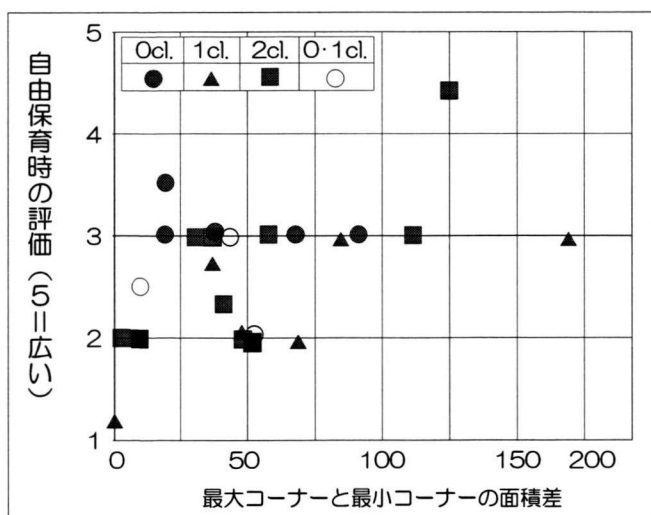


図 16 最大・最小コーナーの面積差と評価の関係

ない。1歳児保育室、2歳児保育室も同様であるが、0・1歳児混合保育室の場合には使用可能壁面長の割合が高いほど、コーナー数が多いという正の相関関係がある。

対象保育室のコーナー数平均より多い3以上のコーナーのある保育室の使用可能壁面長の割合は、0.33以上に分布しており、保育室に使用可能な壁面を一定程度設けることでコーナーの形成が促進される可能性が示唆されるが、全体的な傾向としてのみ見いだせることがらのため、年齢別の確からしきは不明瞭でありさらなる事例の蓄積と検討が必要である。

### 5) 保育室壁面とコーナー数の関係 (図18)

次に、どの程度の長さがあればコーナーの形成が促進されるかをみるため、図18によって保育室の使用可能壁面（腰壁含む、収納面含まず）の長ささとコーナー数の関係を見る。

図からは、使用可能平面長が長い場合にはコーナー数が多い事例が少ないことがわかる。つまり、使用可能な壁面が長くても、コーナー数が増えるわけではない。使用可能な壁面が少ない場合に、こどもたちの遊びが併存しやすいようにコーナーをつくるといった背景もあり、単純な相関の関係はない。なお、年齢別に見ると0歳児保育室と0・1歳児保育室については、使用可能壁面が長いほどコーナー数が多い傾向がある。

### F. 5 アンケート調査の結果から見るコーナーの設置状況、コーナー数と広さ感評価の関係

観察調査の結果に基づく分析を踏まえ、全国の保育所へのアンケート調査の結果について分析する。なお調査においては、コーナーを含む保育室全体の見取り図の記入を依頼し、その結果からコーナーの数と種類を読み取ってカウントした。

#### 1) コーナー数と学齢

図19は「図15 コーナー数と学齢」同様、コーナー数と学齢、保育所の数の分布を示す。

観察調査と同様、学齢があがると、コーナー数が多い事例が増える傾向があることがわかる。しかし、割合で見るとコーナー数0～1のあまりコーナーを設けていない事例が多く、コーナーの設置数には大きな開

きがある。

### 2) コーナー種類の割合 (図20)

図20は、設置しているコーナー数ごとに、コーナーの内容を割合で示したものである。nは該当する保育室数である。年齢別ではなく全体として示しているため、概要的ではあるが、コーナー数が1つのみの場合には床の設えのみで特に遊びの内容を指定しない床遊びのコーナーが大半を占めている。またコーナー数が2、3と増えるにつれて様々な内容のコーナーが設けられるが、絵本、ままごと、ブロック・積み木遊びのコーナーが優先的に設置されやすい傾向にあることがわかる。また、コーナー数が増えるとお絵描きや制作など様々な机上遊びのコーナーが設置されている。

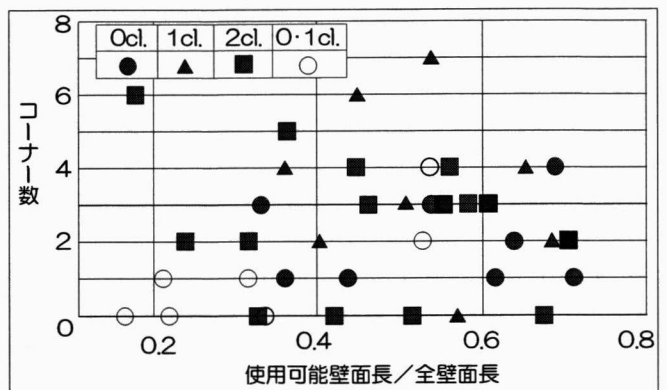


図17 使用可能壁面長とコーナー数の関係

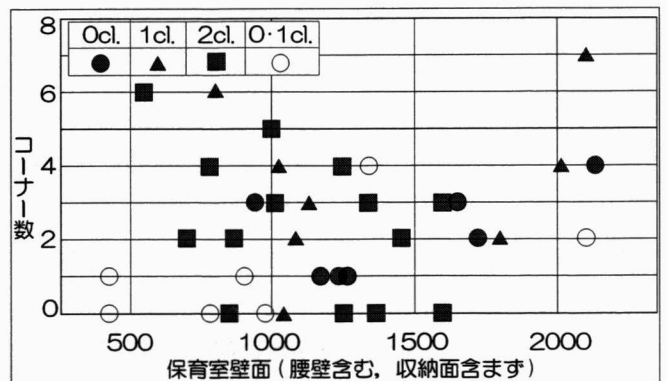


図18 保育室壁面とコーナー数の関係

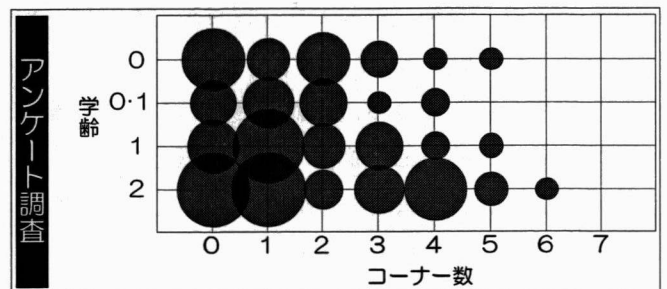


図19 コーナー数と学齢

### 3) コーナー数と自由保育時の評価の関係 (図 21)

\*図のタイトルを修正

図 21 は保育室内のコーナー数と自由保育時の広さ感評価の関係を示す。

図より、全体としてみるとコーナー数と広さ感評価には単純な相関関係はないことがわかる。

個別に見ると、0・1歳児混合保育室では、コーナー数が3以上で「狭い」評価の事例はない。また0歳児保育室と1歳児保育室ではコーナー数が4以上の時に「狭い」評価がないことがわかる。2歳児保育室では分布が複雑で一定の傾向は見られない。

### 4) コーナー数と食事保育時の評価の関係 (図 22)

図 22 は保育室内のコーナー数と食事保育時の広さ感評価の関係を示す。コーナー数が多い事例では「狭い」評価が少ない傾向があるものの、年齢別に見ても明確な傾向は読み取れない。コーナー数と食事時の広さ感評価には明確な関係はないと言える。

### 5) 1人あたり保育室面積とコーナー数の関係 (図 23)

保育室が広いほどコーナーが多く設けられているのかを確認するため、図 23 によって1人当たり保育室面積とコーナー数の関係を示す。図より、1人あたり面積が同程度でもコーナー数の分布は様々であり、1人あたり保育室面積が多いとコーナー数が多いという関係は成立していないことがわかる。

### 6) 保育室面積とコーナー数の関係 (図 24)

図 24 は保育室面積とコーナー数の関係を示す。

図より、同じ面積の保育室でも、コーナー数の分布は様々であり、保育室面積が多いとコーナー数が多いということは見受けられない。

## F. 6 結論

本稿では、0～2歳児保育室を対象として、観察調査とアンケート調査の結果に基づき、保育室の面積・設えと園児の活動実態から望ましい保育室の面積について考察を行った。その結果、保育者による保育室の広さ感評価は、単に保育室の面積によって説明するこ

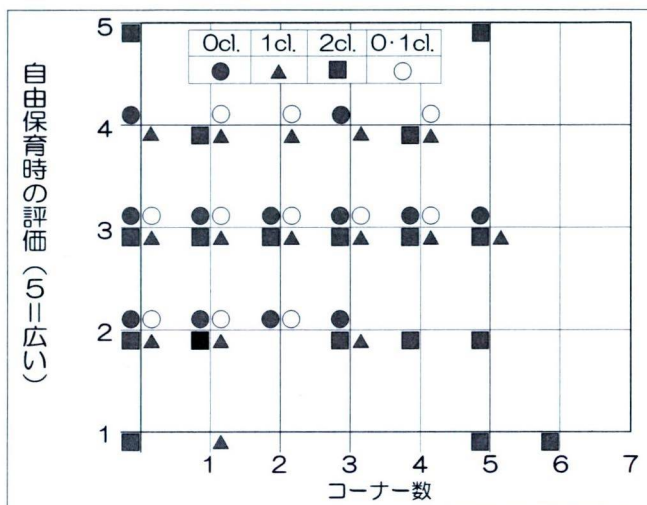


図 21 コーナー数と自由保育時の広さ感評価の関係

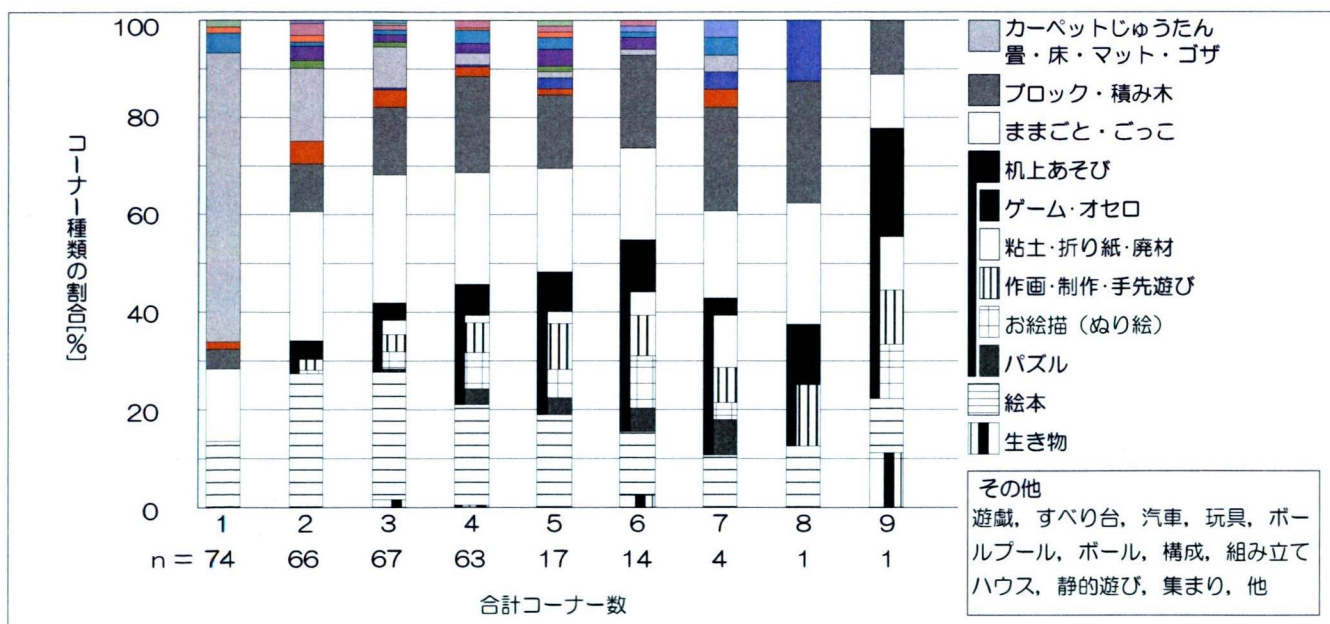


図 20 コーナー種類の割合



とはできず、保育室に設置されたコーナーや活動面積割合、保育人数などによって影響を受けていることが示された。

広さ感評価と1人あたり面積の関係では、0,1歳児の保育室では現行基準に則っている場合に「狭い」評価はなかったが、2歳児室では現行基準を満たしていても「狭い」評価があり、場合によっては面積基準がいまの保育内容を十分に保障していない可能性が示さ

れた。

保育室へのコーナーの設置の状況は、保育内容や方針などによって施設ごとに異なっており、保育室面積が広い、保育室の使用可能壁長が長いからといってコーナー数が多いわけではないことがわかった。またコーナーを多く設置していると広さ感評価が高い、という単純な関係はないものの、コーナーを多く設置している場合には「狭い」評価がないことが確認でき、コーナーの設置によって広さ感評価に良い影響があることが示唆された。これについては、今後アンケート調査結果と観察調査結果との整合性分析を進め、コーナーの種類や大きさをどのように設定すべきかについてさらなる検討を行う。

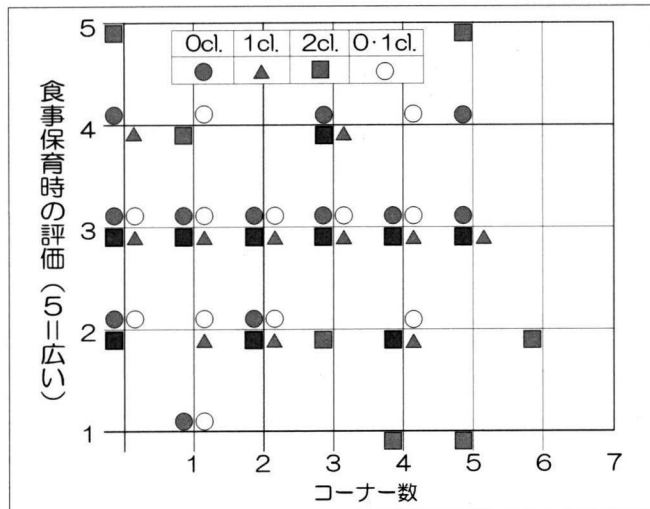


図22 コーナー数と食事時の広さ感評価の関係

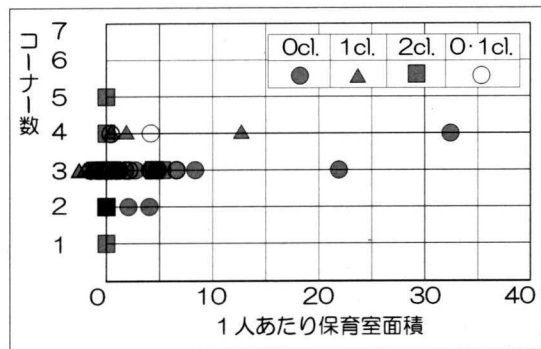


図23 1人あたり保育室面積とコーナー数の関係

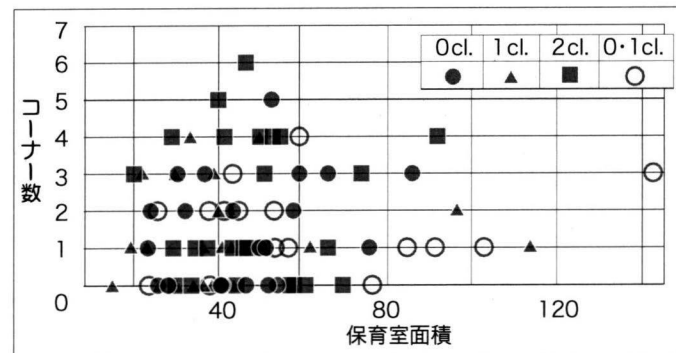


図24 コーナー数と保育室面積の関係

### G. 幼児の心理的領域に関する実験的研究 -指示代名詞領域を対象として-

#### G. 1 研究目的

人間を取りまく環境の設定には、身体や動作から算出されたものの他に、パーソナルスペース等の心理的領域・行動特性(図1)を空間構成に反映させる試みがあり、オフィスや病院といった様々な構築環境への研究の帰還例がある。一方、子どもでは、小中学校で心理・行動面からの空間規模を検討する研究(文1)は見あたるものの幼児を対象とした心理的領域の研究例は乏しい。

現在、幼児のための保育施設環境は、認定こども園の施行や、高まる幼児教育への意識により多様化している。また、保育施設の重大な課題として、全国の大都市を中心に広がる待機児童の問題のための対策として、既設施設の定員を引き上げる政策をおこなっている。それによって幼児一人当たりの活動面積が、法律で定めるところより、さらに圧迫されていることが、幼児の生活環境や発達に悪影響を与えるとの懸念が高い。そもそも、これまでの保育施設の空間規模の設定は、児童福祉施設最低基準や幼稚園設置基準によって定められているが、それらには「畳」など大人の身体スケールから産出したと思われる値が並ぶが、その算出根拠

は曖昧である。幼児にとって適した環境を再考する際、身体的スケールだけでなく、心理的スケールにも着目した空間的な質を改善することが重要であると考え。

そこで本研究は、幼児を取りまく環境を検討するため、幼児の心理的領域の一つの表出として捉える指示代名詞「これ、それ、あれ」の使い分けに着目し、3歳児以上の幼児を対象として(1) 幼児の指示代名詞領域の形状を姿勢や性別、学年別を分析の視点として明らかにし、(2) 領域分節の個人差に関して、その傾向や特徴を明らかにする。また(3) 領域を表現する言葉に焦点をあて、言語学的な視点から考察をおこなうこと。さらに(4) 既往研究との比較から、幼児と大人の指示代名詞領域の比較をおこなうこと。以上4項目について検証することを目的とする。

研究の構成は、調査として前・右斜め前・横方向の指示代名詞領域の実験的調査をおこない、結果をもとに分析をし、幼児の指示代名詞領域の把握をおこなう。考察は3つで、考察の方法は、①回答「その他」の考察、②領域分節の個人差の考察、③幼児における指示代名詞領域の比較である。③の比較では、2つの既往研究との比較をおこなう。考察の①と②は、幼児の指示代名詞領域の調査結果をよりよく理解するための、補足

的な位置づけとする。

## G. 2 調査の方法

### G. 2-1 指示代名詞領域の調査方法

本研究は、言語能力、友人関係、自我の芽生えなどの観点から3歳以上児を対象とし、被験者に対して前・右斜め前・横方向の調査により、指示代名詞領域の形状を求めた。

調査の方法は以下の通りである。準備として、指示物(注4)を葉書大のカードにプリントし、225mm間隔で1800mmまでの前・右斜め前・横方向に(各8ポイント)等間隔で配置する(図2)。

調査の進行は以下の通りである。

- ①幼児の名前、クラス、年齢、誕生月を記録する。
- ②指定位置に移動させる。
- ③注意事項(動かないで、等)を伝えた後、調査を始める。
- ④進行係(兼記録者)は幼児の脇に控え、教示文に指示された通り、ランダムに指示物の名前をもちいて「〇〇はどれですか?」と問いかける。
- ⑤幼児の発言を「これ・それ・あれ・その他」に分け、記録する。なお、その他に関しては、具体的にどのような発言をしたかを記録する。



写真：パーソナルスペースの例



写真：幼児の行動特性の例

図1. 心理的領域と行動特性

⑥以下、④⑤を繰り返す。

⑦全ての質問が終了したら、調査終了。

また本調査は、事前に幼児に対し、指示代名詞についての説明や「これ・それ・あれを使って」というような説明はおこなわない。これは、指示代名詞の説明することによって、幼児各々の理解能力の差が回答に影響することを防ぐためである。

調査結果の回答例を図3に示す。

### G. 2-2 調査の条件と施設概要

調査は14回で、調査の許可が得られた、保育園 Tm (愛知)、保育園 Hd (愛知)、保育園 Ss (東京)、保育園 Hz (愛知) でおこなった(図4)。調査場所は、各園から、それぞれ許可を得ることができた屋内施設でおこなった(図5)。なお調査期間中、天候や行事による場所の変更などの影響は受けなかった。

被験者は、園の許可を得ることができた各園に通う3歳5ヶ月から6歳5ヶ月までの212名であった。内訳を図6に示す通り、姿勢別では、立位104名、椅座位108名、性別は、男104名、女108名、学年別では、年長(5歳5ヶ月から6歳5ヶ月)が71名(男女比30:41)、年中(4歳5ヶ月から5歳5ヶ月)が74名(男女比41:33)、年少(3歳5ヶ月から4歳5ヶ月)が67

名(男女比33:34)である。

### (倫理面への配慮)

本研究では調査の際、幼児に名前と年齢、誕生日をヒアリングした。名前に関しては、調査の円滑な進行と重複を避けるために使用し、年齢と誕生日に関しては分析(月齢での分析を今後検討)に使用する。

また、調査対象のクラスの選定は、保育計画に影響が無いよう、調査当日に施設運営者およびクラス担当者から指定を受けおこなった。また、記録用にデジタルカメラでの撮影を、幼児個人の顔が写らないよう考慮することを条件に許可を頂き、調査方法の改善時や資料として用いた。なお、ビデオカメラでの撮影はおこなっていない。

### G. 3 分析方法・調査結果

以下、1. 調査指示代名詞領域の調査について、分析の方法と結果について述べる。

#### G. 3 分析方法

分析は、2種類の方法でおこなう。

##### G. 3-1 単純集計

距離ごとに発言の種類を単純集計し、発言数の割

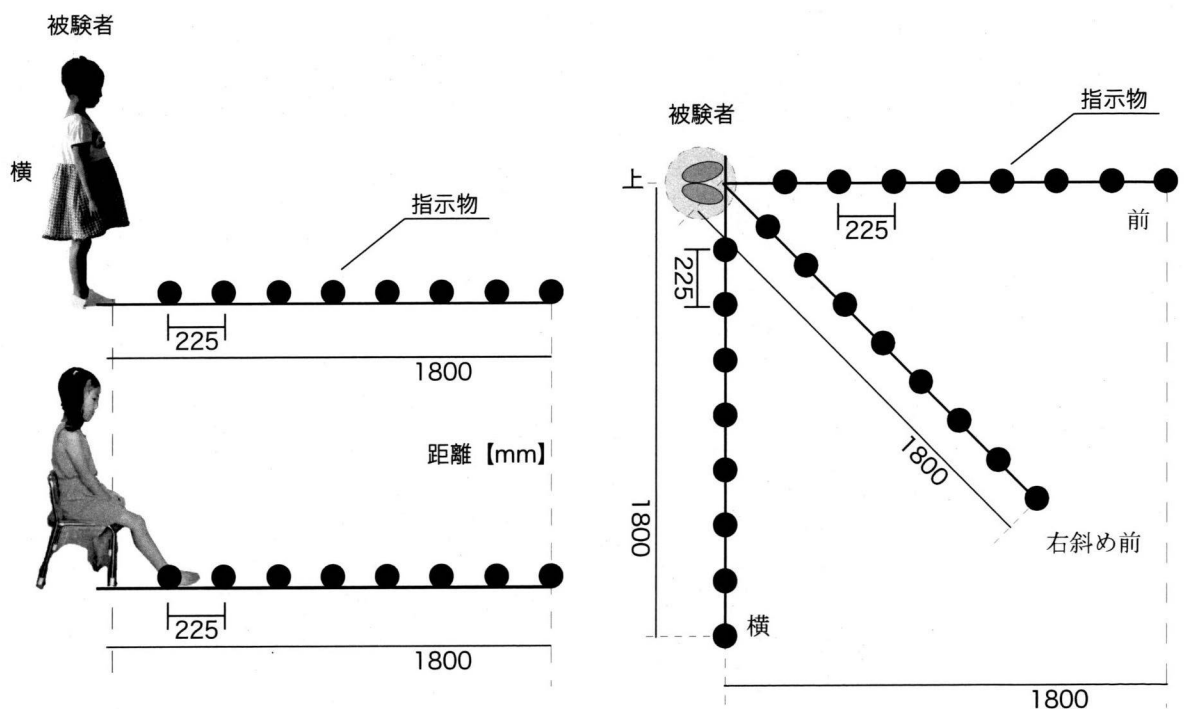
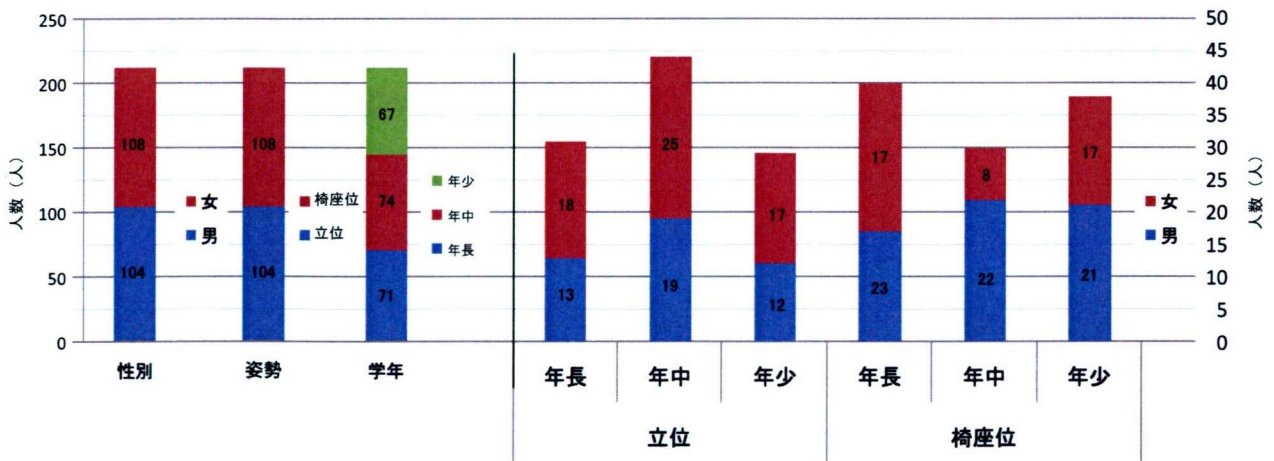
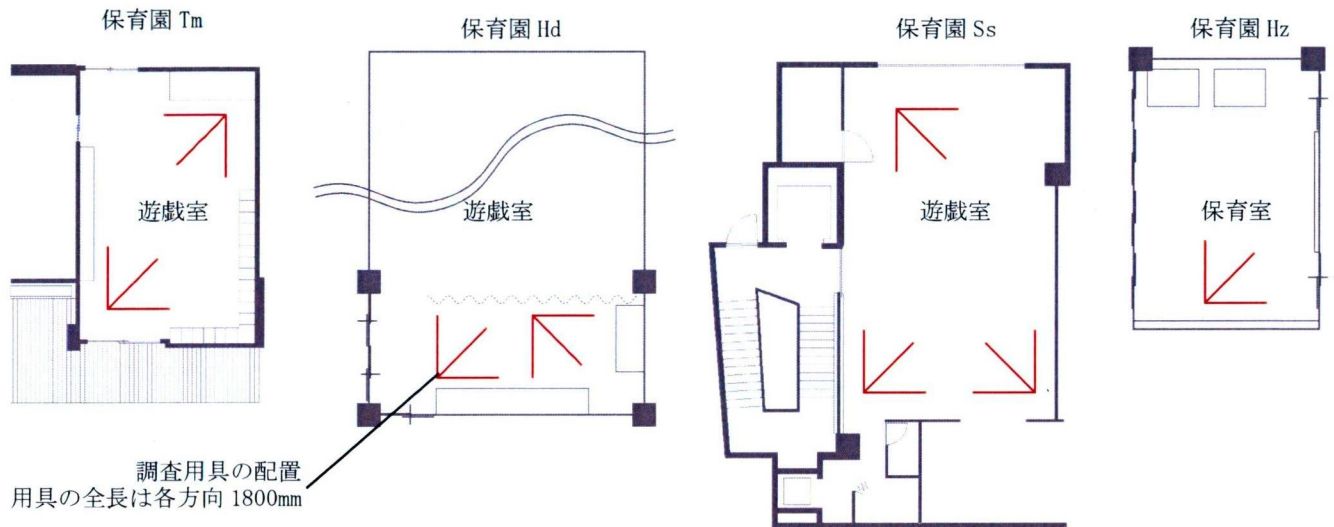
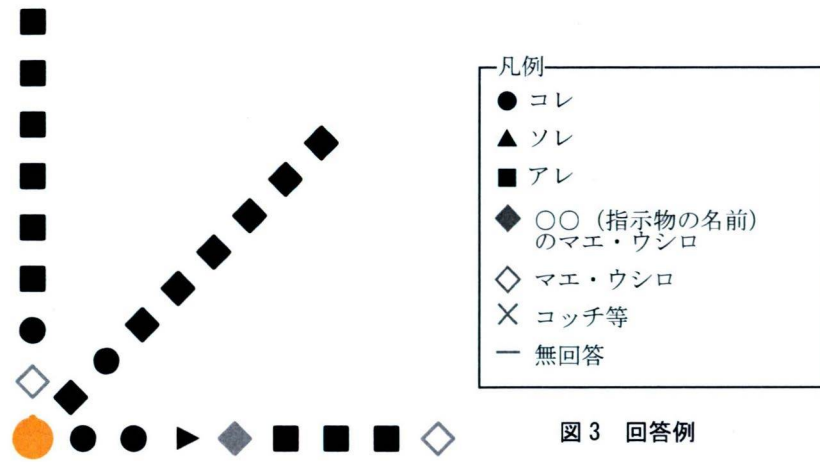


図2 指示物の位置と姿勢



合をグラフに表す。これにより、各距離での指示代名詞選択の割合、指示代名詞の分布状況を示す(図7)。

### G. 3-1-2 $\chi^2$ 検定

距離別に指示代名詞の回答がいずれに多いかに対する  $\chi^2$  検定および多重比較をおこなう(注5)。

有意水準は5%と10%以下とした。図8に  $\chi^2$  検定および多重比較を図式化の例を示す。それぞれの有意水準で有意差がみられたポイントには「コレ」は●・○(黒塗5%、白抜き10%、以下同様とする)、「ソレ」は▲・△、「アレ」は■・□で示し、有意差が見られなかったポイントには×で示す。

### G. 4 結果

結果を、被験者を全体、姿勢別、性別、学年別で示す。

#### G. 4-1 全体(単純集計)

幼児全体(n=212)の結果(図9)では、全体を通して、225mmから450mmで「コレ」という発言の割合が多く、特に右斜め前方向と横方向で50%を超える。675mmからは、距離が遠くなるにつれ徐々に「コレ」の割合は減少し、1800mmでは10%程度となるが、0%とはならない。675mmから「アレ」発言が多くなり、900mmからは過半数の50%を超える。「ソレ」という発言は、いずれの方向においても少なく、5%程度である。また、「その他」の発言は、いずれの方向でも10%程度あるが、特に被験者からもっとも遠い1800mmという限定的なポイントで多くなる傾向がある。

#### G. 4-2 姿勢別(単純集計)

姿勢別(立位 n=104、椅座位 n=108)の結果(図10)で、立位では、前方向において225mmから450mmで「コレ」と発言する割合が50%を上回り、椅座位では、450mmで「コレ」と発言する割合が40%程度であり、「アレ」の発言が40%程度と、立位に比べてやや多い。一方、675mmから1800mmまでの発言割合には、差がなく両姿勢でアレの発言が多い。右斜め前方向においては、「コレ」と発言する割合が、前方向と同様に450mmで椅座位が10%程度少ない結果となっているが、50%には達している。675mから1800mmまででは、前方向と同様に姿勢での差が少ない。また、横方向においては、前方向および右斜め前方向で見られた450mmでの発言

割合に、姿勢での差は表れなかった。以上から、前方向と右斜め前方向の発言割合に関しては、立位では、450mmを「コレ」と発言する幼児が多いが、椅座位では、「コレ」と「アレ」の発言数の差が少ないという特徴が見られ、椅座位の領域が立位に比べて狭い可能性が考えられる。

#### G. 4-3 性別(単純集計)

性別(男 n=104、女 n=108)の結果(図11)では、

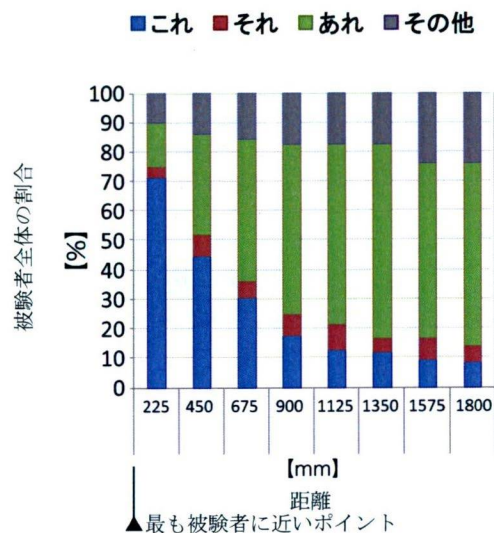


図7 単純集計の例

年齢	性別	姿勢	225	450	675	900	1125	1350	1575	1800	2025	2250	2475	2700	2925
11.75	男	立	40	35	24	15	10	3	3	5	3	0	2	1	2
11.75	女	立	1	2	1	1	1	2	2	2	1	1	1	1	0
11.75	男	座	1	3	17	24	30	30	30	33	34	34	33	30	28
11.75	女	座	5	7	3	7	6	6	12	7	7	10	11	11	17

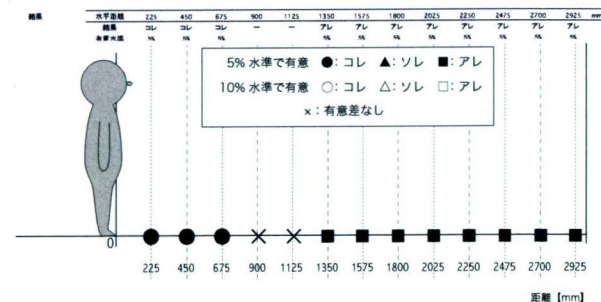


図8  $\chi^2$  検定の例

回答の傾向に性別の特徴は少ないように見えるが、「その他」の回答は、やや女の方が多かった。これは、女の方が一般的に言語機能の発達が早く、語彙力が豊富である（文2）ため、指示代名詞以外の言葉で指示物を表現する選択をおこなったためだと考えられる。

G. 4-4 学年別〈単純集計〉

学年別（年長 n=71、年中 n=74、年少 n=67）の結果（図12）は、年長では、ソレと回答する割合が他学年に比べてやや多く、「その他」の回答も全てのポイントで割合が高い。年中は、いずれの方向においても同様の傾向がみられた。2225mmから450mmまで「コレ」が多くなり、675mmから1800mmは「アレ」の発言が多くなる。「そ

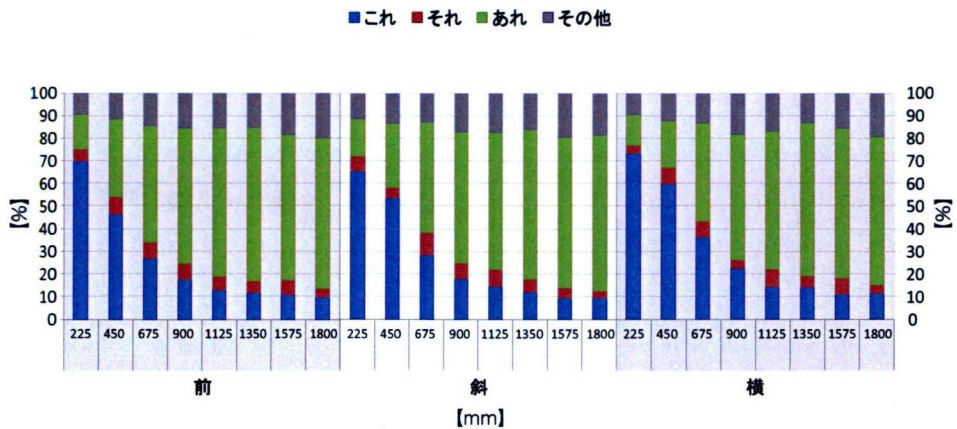


図9 単純集計 幼児全体

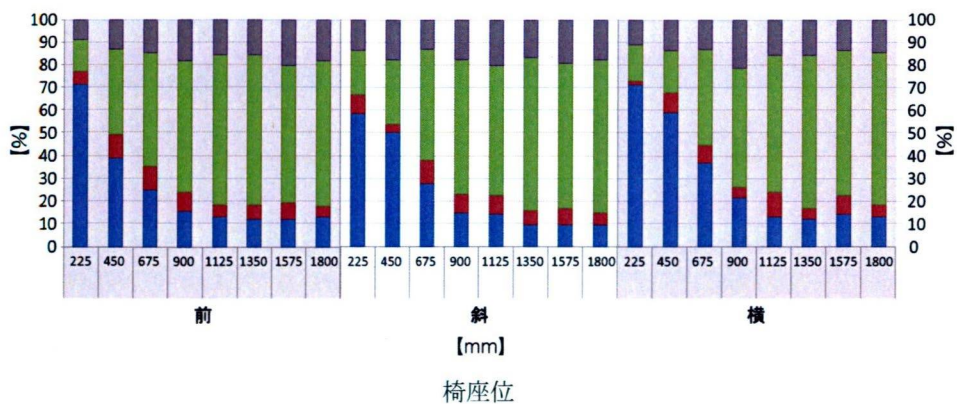
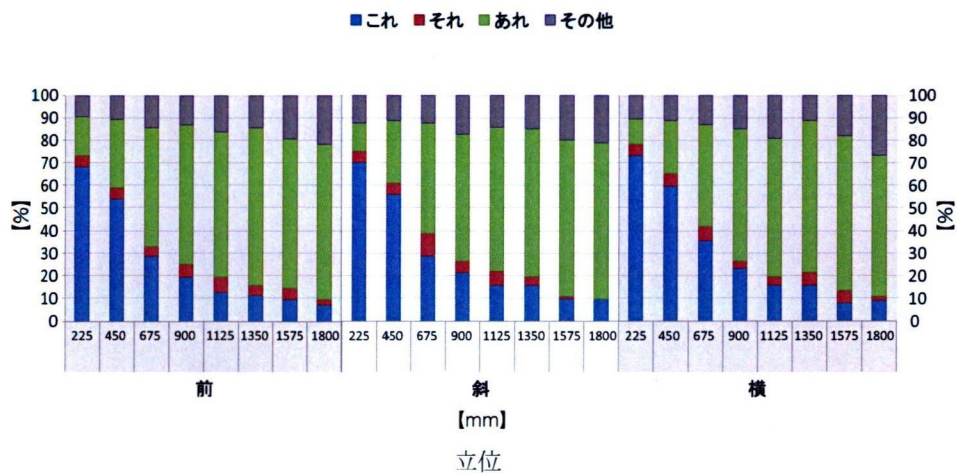


図10 単純集計 姿勢別

の他」の発言も全体的に少ない。年少は、225mmから450mmで「コレ」という発言が50%を超えるが、675mmから1800mmまでの間で、あまり割合が減らず、常に30%は「コレ」を示す。これは距離に応じて指示代名詞を使っていない被験者が多数存在すると考えられる。また「その他」の発言も、年長の傾向と同様に、限定的な1800mmと中間の距離にある1125mmで増加している。「ソレ」という発言は極めて少ない。

#### G. 4-5 全体 (χ<sup>2</sup>検定)

幼児全体 (n=212) の検定結果 (図13) では、前方向のコレ領域は、225mmのみ (p>0.05)、右斜め前と横方向は225mmから450mm (p>0.05) となり、前方向に狭いコレ領域であった。コレ領域とアレ領域の境目に、ソレ領域は存在せず、曖昧な領域であるグレーゾーンとなった。アレ領域は、前方向では、675mm (p>0.05)、右斜め前と横方向では、900mmから (右斜め前方向は p>0.05、横方向の900mmは p>0.1、1125mmは p>0.1) であった。

#### G. 4-6 姿勢別 (χ<sup>2</sup>検定)

姿勢別 (立位 n=104、椅座位 n=108) の検定結果 (図14) で、立位では、コレ領域が前と右斜め前方向で225mmから450mm (p>0.05) で、横方向で225mm (p>0.05) と、横方向に狭い形であった。また、前と右斜め前方向のグレーゾーンが広く、領域が曖昧であると考えられた。

椅座位では、コレ領域が前方向と右斜め前方向で225mm (p>0.05) と狭く、横方向が225mmから450mm (p>0.05) と広がっている。このように、姿勢によってコレ領域の形状の違いが明らかになった。

#### G. 4-7 性別 (χ<sup>2</sup>検定)

性別 (男 n=104、女 n=108) の検定結果 (図15) では、コレ領域の形状は、男で前方向が225mm (p>0.05)、右斜め前と横方向が225mmから450mm (p>0.05) となった。

女では、前方向が225mm (p>0.05) で、右斜め前と横方向では225mmから450mm (右斜め前方向の225mmは p>0.05、450mmは p>0.1) となり、ほぼ性差がないこと

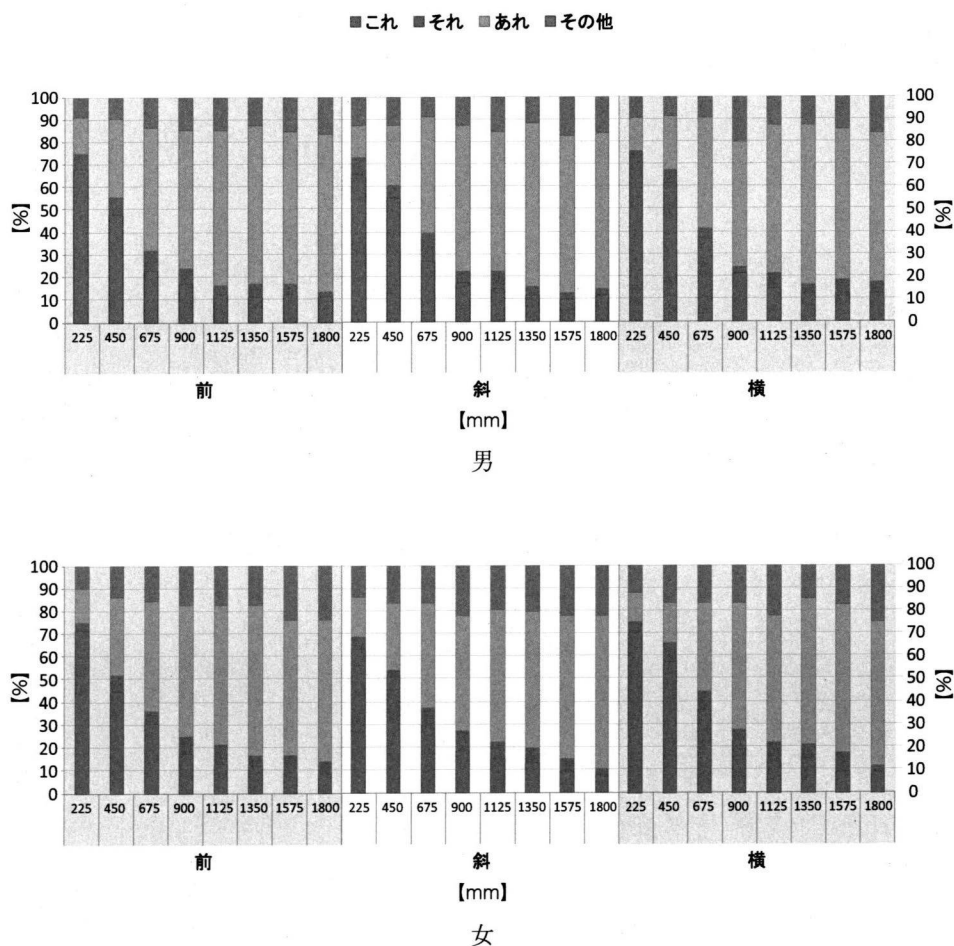


図11 単純集計 性別

が明らかになったが、コレ領域とアレ領域の境目のグレーゾーンの広さは、女の方が広いという特徴がみられる。

#### G. 4-8 学年別 $\chi^2$ 検定

学年別（年長 n=71、年中 n=74、年少 n=67）の検定結果（図 16）で、年長では、コレ領域が前と横方向で 225mm ( $p>0.05$ ) で、右斜め前方向は有意差無しと、形状が小さく、コレ領域とアレ領域の境目のグレーゾ

ンが広範囲にわたった。単純集計の結果（図 12）と比較すると、グレーゾーンとなったポイントにおいて「ソレ」という発言が多く使われ始めていることがわかる。

年中では、コレ領域が前と右斜め前方向で 225mm ( $p>0.05$ )、横方向で 225mm から 450mm ( $p>0.05$ ) となり、アレ領域は、前方向で 675mm から ( $p>0.05$ )、右斜め前方向で 450mm から ( $p>0.05$ )、横方向で 675mm から (675mm は  $p>0.1$ 、900mm は  $p>0.05$ ) であった。グレーゾ

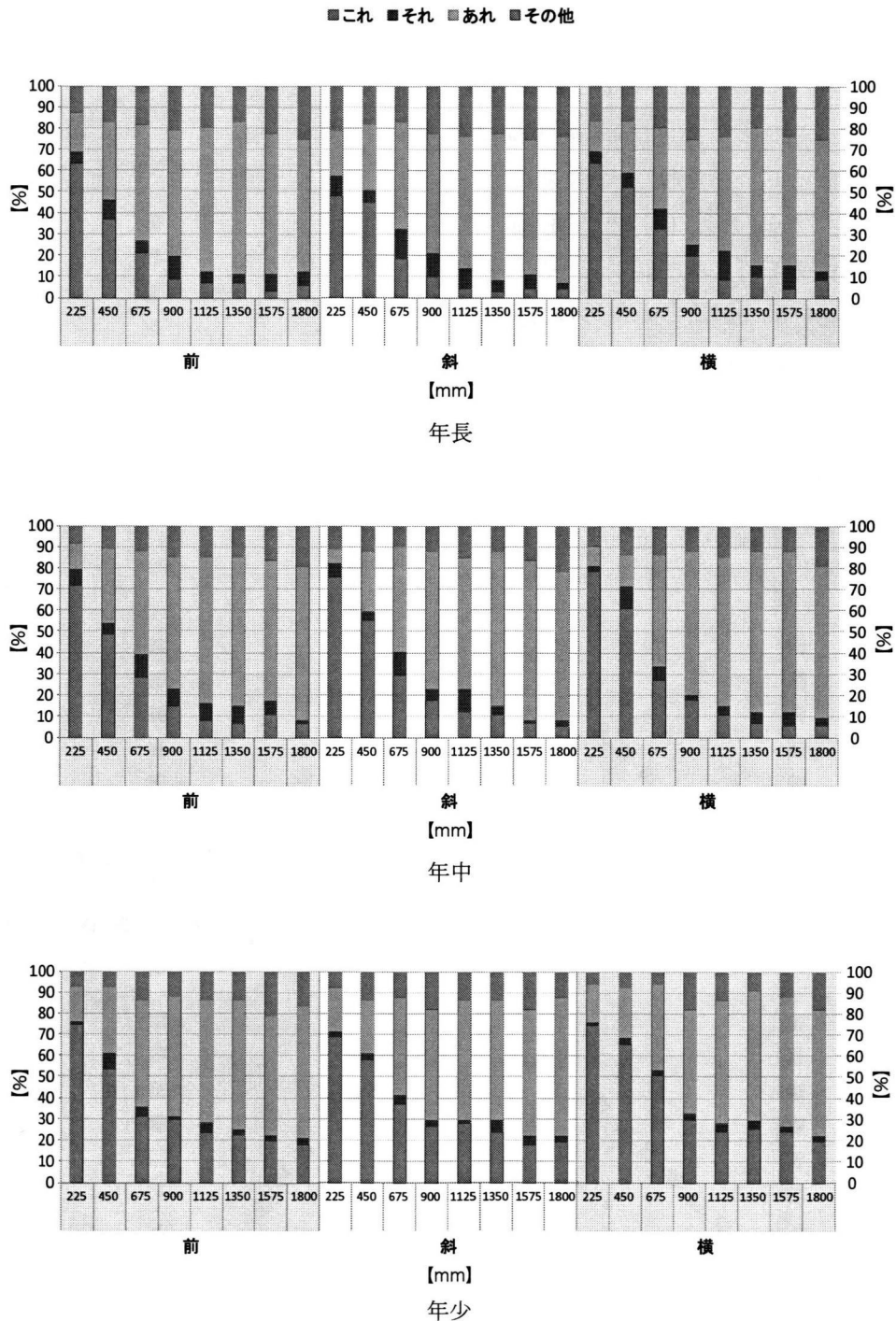


図 12 単純集計 学年別



ンも少ないことから、コレ領域といアレ領域の二分節において成熟期と考えられる。

年少では、コレ領域は、横に広い形状で表れたが、アレ領域の有意差がまとまって表れず、グレーゾーンが広がった。「コレ」という発言がどのポイントにも多いために、コレ領域が他の学年より広く表れたと考えられる。

**G. 4-9 姿勢 × 性別 (χ<sup>2</sup> 検定)**

姿勢別 × 性別 (立位 × 男 n=44、椅座位 × 男 n=60、立位 × 女 n=60、椅座位 × 女 n=48) の検定結果 (図 17) で、立位の性差を比べると、コレ領域の形状は、男では、前・横方向に 225mm から 450mm (前方向は p>0.1、横方向は p>0.05) と広い三角形の形状であった。

立位の女は横方向が 225mm (p>0.05) と、横方向に狭い扇形が表れ、違いがみられた。

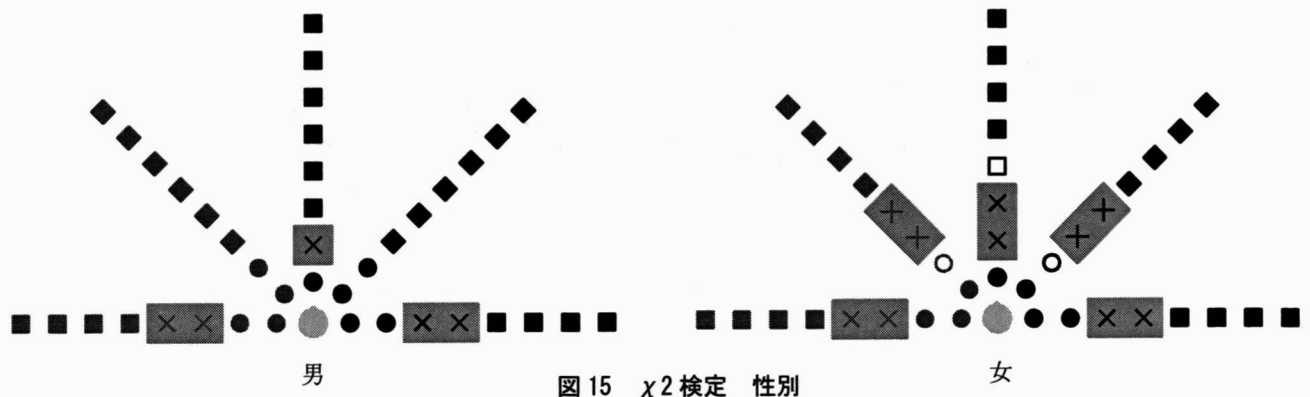
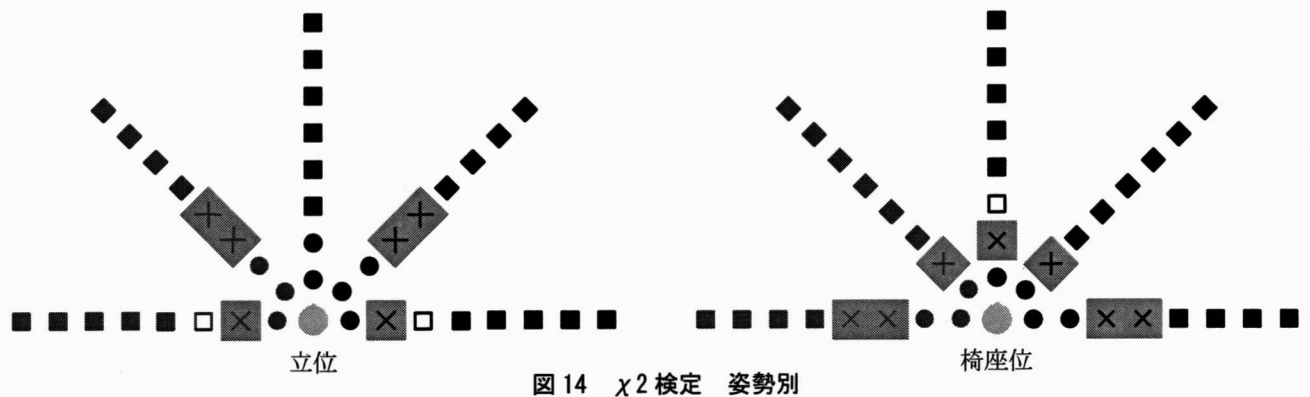
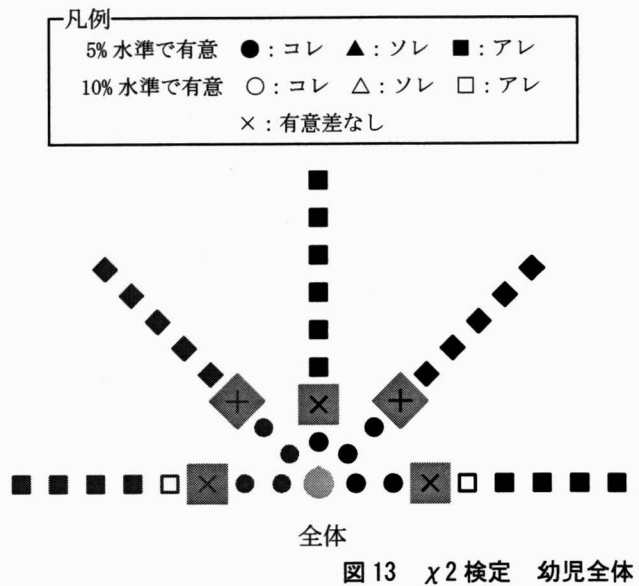
椅座位の男では、コレ領域が前と右斜め前方向で 225mm (前方向は p>0.05、右斜め前方向は p>0.1) となり、横方向では 225mm から 675mm まで (p>0.05) と、立位より一回り大きい形状のコレ領域を示した。

椅座位の女では、コレ領域は、前方向で 225mm (p>0.05)、横方向で 225mm から 450mm (225mm は p>0.05、450mm は p>0.1) となり、右斜め前方向の有意

差は表れず、グレーゾーンが非常に広く表れ、男の結果と異なった。

**G. 4-10 姿勢 × 性別 (χ<sup>2</sup> 検定)**

姿勢別の学年別の結果を (図 18) 示す (立位 × 年長 n=31、立位 × 年中 n=44、立位 × 年少 n=31、椅座位 × 年長 n=38、椅座位 × 年中 n=30、椅座位 × 年少 n=38)。立位の年長では、前方向にコレ領域はなく、右斜め前方向の 450mm (p>0.1) と、横方向の 225mm から 450mm (p>0.1) がコレ領域であった。アレ領域



は、前方向で 900mm から 1800mm (900mm と 1800mm では  $p > 0.1$ 、1125mm から 1575mm では  $p > 0.05$ )、右斜め前方向では、1125mm から 1575mm ( $p > 0.05$ )、横方向では、1350mm と 1800mm ( $p > 0.1$ ) で有意差を示した。椅座位の年長では、コレ領域の有意差が表れなかった。アレ領域もまばらで、前方向では、1350mm ( $p > 0.1$ )、右斜め前方向と横方向では、1125mm から 1350mm (1125mm では  $p > 0.1$ 、1350mm では  $p > 0.05$ ) と 1800mm ( $p > 0.05$ ) で示した。

立位の年中では、コレ領域は、前方向で 225mm から 450mm ( $p > 0.1$ )、右斜め前方向と横方向では、225mm ( $p > 0.05$ ) であった。アレ領域は、前方向では、

1125mm から 1800mm (1125mm から 1350mm と 1800mm では  $p > 0.05$ 、1575mm では  $p > 0.1$ )、右斜め前方向では、1575mm から 1800mm ( $p > 0.05$ )、横方向では、1125mm から 1800mm (1125mm では  $p > 0.1$ 、1350mm から 1800mm では  $p > 0.05$ ) であり、椅座位の年中では、コレ領域がい

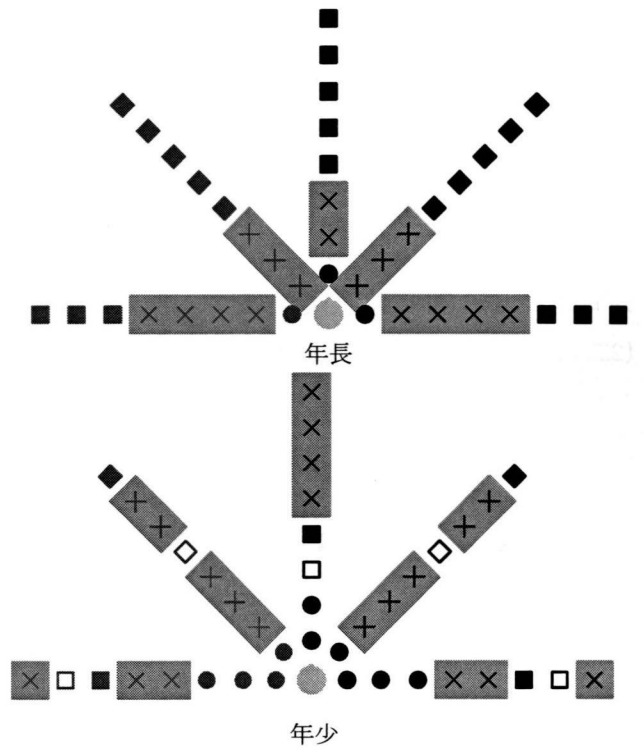
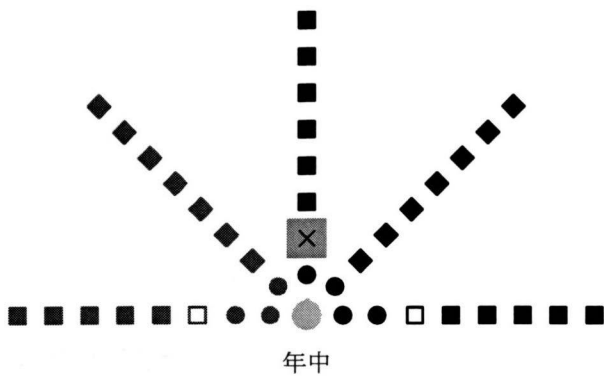


図 16  $\chi^2$  検定 学年別

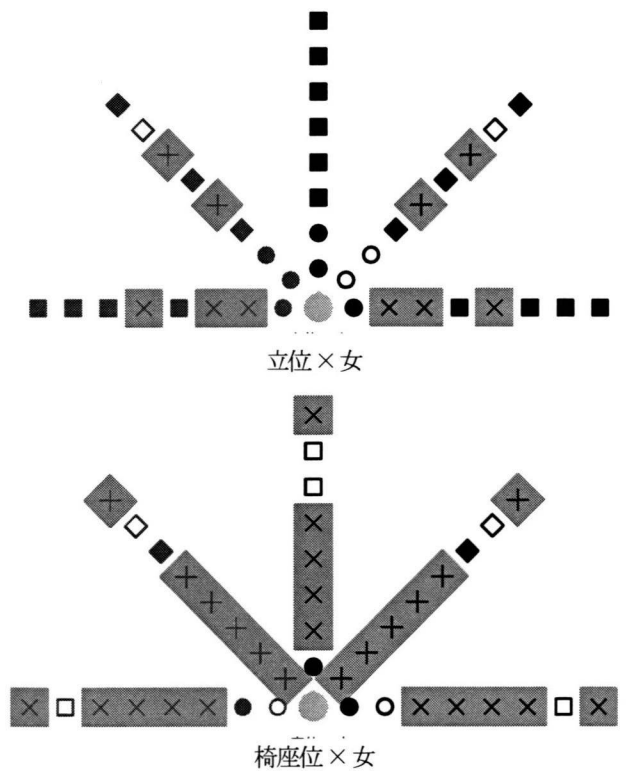
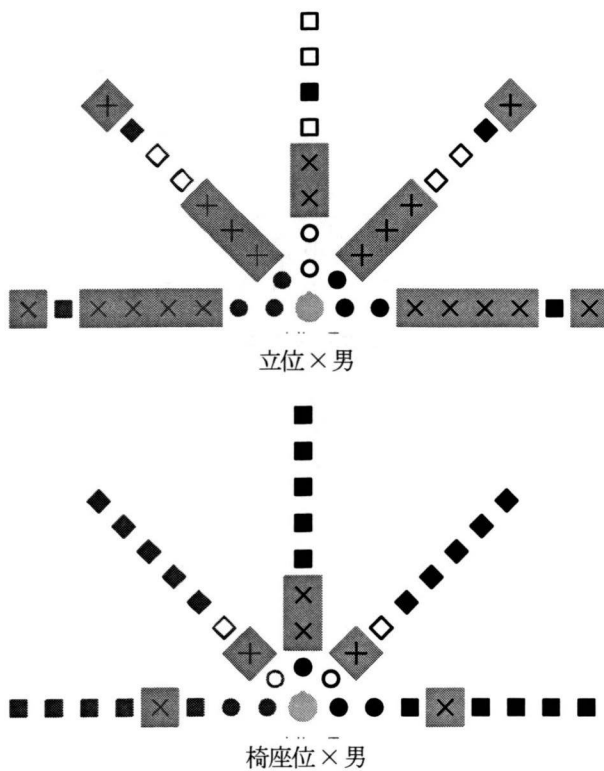


図 17  $\chi^2$  検定 姿勢 × 性別

ずれの方向でも 225mm ( $p>0.05$ ) で、アレ領域は、前方向で 1125mm から 1800mm (1125mm から 1575mm  $p>0.1$ 、1800mm  $p>0.05$ )、右斜め前方向で 900mm ( $p>0.1$ ) と 1350mm ( $p>0.05$ )、横方向で 900mm から 1800mm (900mm と 1800mm では  $p>0.1$ 、1125mm から 1575mm では  $p>0.05$ ) であった。

立位の年少では、コレ領域がいずれの方向でも 225mm ( $p>0.1$ ) で表れたが、アレ領域は、前方向の 900mm ( $p>0.1$ ) と横方向の 1350mm ( $p>0.1$ ) の 2 ポイントのみで有意差を示し、領域としての広がりは見られなかった。椅座位の年少では、前方向と右斜め前方向で 225mm ( $p>0.05$ )、横方向で 225mm から 450mm (225mm では  $p>0.05$ 、450mm では  $p>0.1$ ) でコレ領域を

示し、アレ領域は、前方向で 1125mm ( $p>0.05$ )、右斜め前方向で 1350mm から 1800mm (1350mm と 1800mm では  $p>0.1$ 、1575mm では  $p>0.05$ )、横方向では、1125mm から 1800mm (1125mm から 1575mm では  $p>0.1$ 、1800mm では  $p>0.05$ ) となり、グレーゾーンが多く表れた。男女の比較と同様に、立位の方が有意差の認められたポイントが比較的多く、領域としての認識のしやすさが考えられる。

### G. 5 考察

考察の方法は、前・右斜め前・横方向の指示代名詞領域の調査の結果を元に、3つの方法でおこなう。

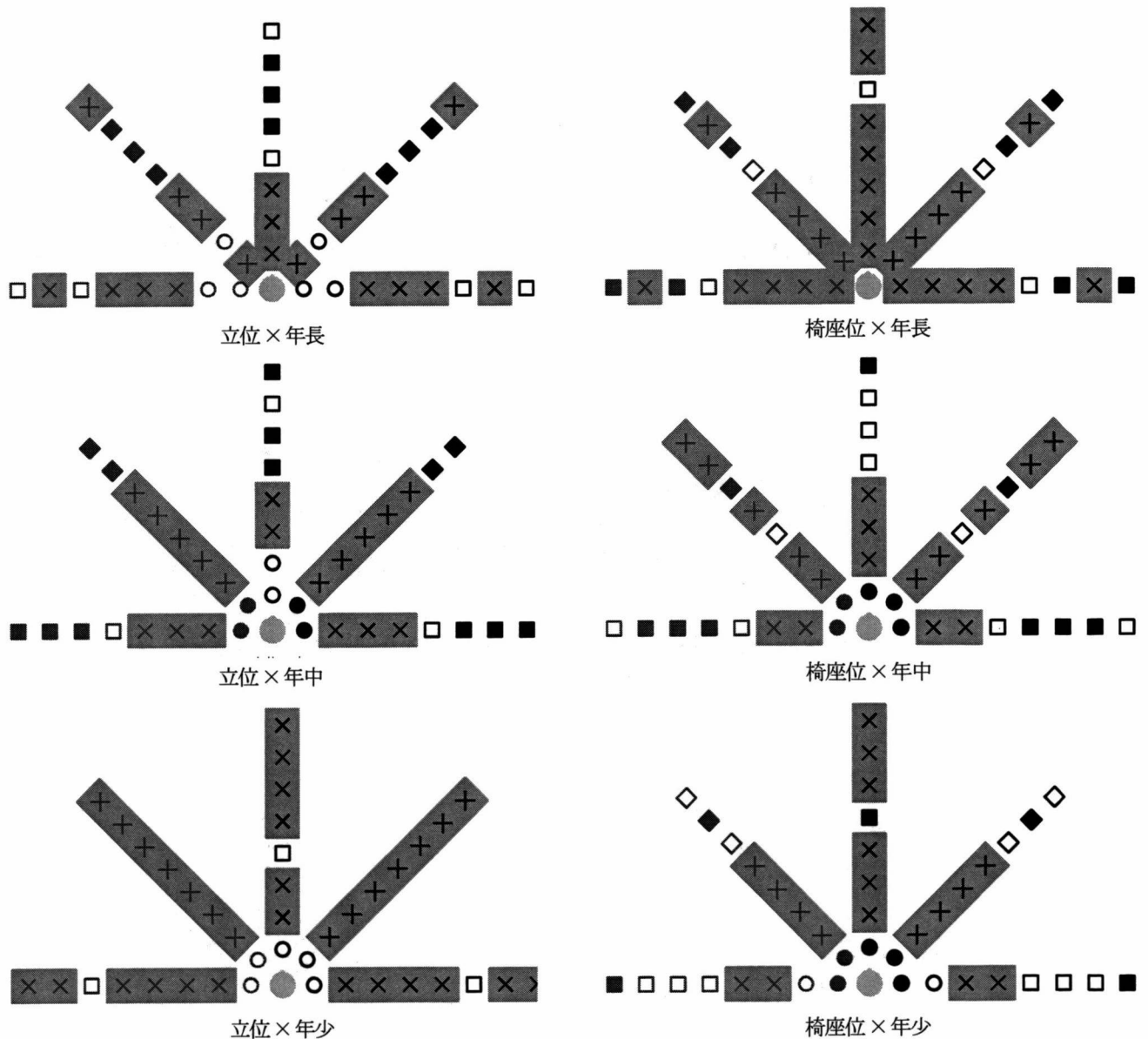


図 18  $\chi^2$  検定 姿勢 × 学年別

### G. 5-1 指示代名詞以外の回答の考察

調査結果の中で、自由な発話によってもたらされた指示代名詞以外の発言に焦点をあて、自由な発話で心理的領域を表す場合、どのような言葉で発話し、使い分けているのかを明らかにすることを目的に考察をおこなう。回答の分布状況を、調査の回答の中で、一度でも指示代名詞以外の発言をした被験者の人数に、一人あたりの発言回数(一方向8ポイント×前・右斜め前・横方向) 24ポイントを掛けたものを母数として、回答の種類を割合で示す(図19)。

考察の結果、「〇〇のマエ・ウシロ」の回答は、年長の利用割合が多く、より正確に指示物の位置を伝えようとする被験者の心理によって多く使われたと考えられ、言語発達が進んでいる年長の特徴であった。また、「ウシロ・マエ」という回答は、調査の中で最も被験者に近い指示物や、最も遠い指示物を指す場合の「限定的な場面」で多く利用されていたが、年少の中には、「コレ」=「近い」と「アレ」=「遠い」という指示代名詞のように「マエ」=「近い」と「ウシロ」=「遠い」というように領域の分節を表す言葉として使っている

ケースも数名確認された。

学年別の傾向としては、年長では、言語機能の発達から指示代名詞より情報量が多い「〇〇のマエ・ウシロ」という言葉が多く使われる傾向があり、年少では、比較的簡単な「マエ・ウシロ」が多く使われたが、他の学年では、限定的な場所で使われているこの「マエ・ウシロ」を、限定的でない場所にも使用していることが明らかになった。年中では、「その他」の回答が全体を通して少なく、指示代名詞を使う被験者が多いということが明らかになった。

### G. 5-2 領域分節の個人差の考察

領域分節の個人差を明らかにすることを目的とし、調査結果のから、個人の領域分節を(1)領域分節の成熟度(5段階評価)と(2)指示代名詞の使用率(5段階評価)の二つの指標にしたがい分類する(図20)。また、領域分節が比較的成熟しつつあると考えられる部分に範囲を限定し、詳細な考察をおこなう(図20:a~d)。

指標全体の傾向を学年別に色分けし図21に示す。年長では、個人の領域分節の成熟度と指示代名詞の使用率において差が大きく、広く分布している。特に、指

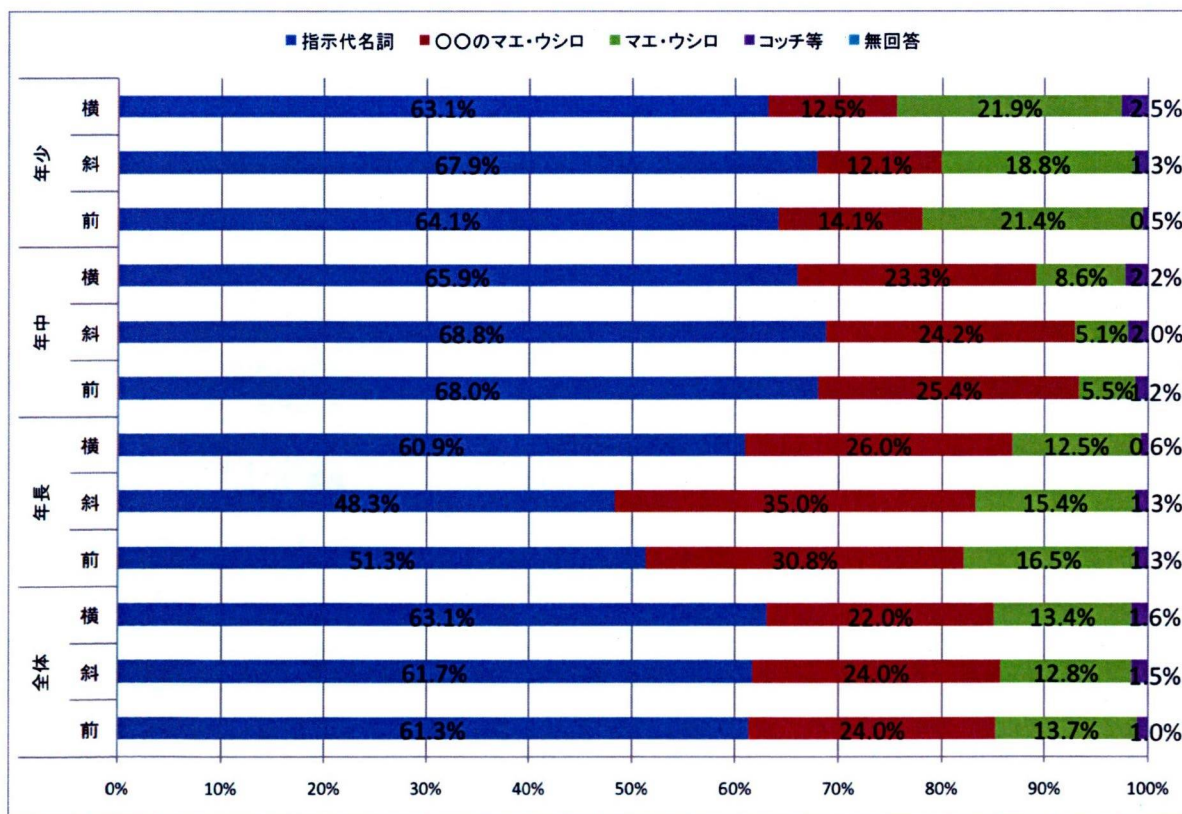


図19 指示代名詞以外の回答の分布状況